

歸^き命^{みやう}毗^び廬^る遮^{しや}那^な佛^{ぶつ}

「幼時の追憶」、その八

依津の港

依津^{エラツ}村は數百戸の小漁村で、狭い灣の底に村の中心、祇園町といふのがあるが、三方は山で圍まれてゐて、交通は主として海路によつてゐる。日に二回午前と午後には小蒸気船が發着するほか、渡海船が毎朝、海路五里を渡つて宇和島町（今は市）へ通ふ。その頃、東郷丸といふ小蒸気と赤穂丸といふ小蒸気とが競争をして、全村民を興奮させた。競争といふのは速力と運賃との競争である。東郷丸は小柄で白色、赤穂丸はやゝ大きくて黒であつた。實際の速力は甲乙なかつたやうに思はれるが、スマートな東郷丸が白浪を蹴つて港に走り込む姿は、多數の村民の聲援を得るに十分であつた。赤穂丸はやゝ鈍重な感じで、表情に乏しかつたため大分損をしてゐた。それに村の大先生といふべきお醫者さんの家の或る女性が東郷丸に肩を持つてゐられたの

曾根保

で、祇園町の人は皆その方を最眞にした。或る朝、船着場で例によつて皆が片唾をのんで船を待つてゐた。二十丁位沖合の、右手から灣を抱いてゐる黒い岬をぎちらの船が先に廻るかゞ見ものなのである。するに、煙突の前から眞白な蒸氣を夥しく噴き出して、東郷丸がはいつて來た。側にゐたその女性が「あれ、あんなにタルトを切つてゐる。あれでなくてはいけない」なごご聲高に説明してゐられた。私は、今でも、タルトなるものが何であるかを明にしないが、汽船や汽車が蒸氣の餘剰らしいものを噴き出してゐるのを見るに、幼いその頃のこころを想ひ浮べるのである。赤穂丸は一時、依津で休航してゐたことがある。甲板から、海へざんぶくゞ河童もが飛び込んだりしたのを思ふに、それは夏の頃であらう。私は赤穂丸の火夫に頼まれて空つぽの汽罐の中へはいつたやうに記憶してゐる。何のためだつたかはつきり覺えてゐないが、多分その時の「駄賃」だつた

のであらう、私は銅貨を十数枚を『青年健康法』といふ本を貰つた。本は當時少しも顧みなかつた。中學一年頃、健康に全く自信がないやうに思はれた時初めて開いて讀んだ。自瀆なきさいふ言葉がいやに目についたやうであつた。さうして赤穂丸の火夫が、健康法なきさいふ本を小學生の私にくれたか一向に見當がつかない。赤穂丸は程なく就航したが、東郷丸に壓倒されて、やがてわれ／＼から姿を消し、忘れられてしまつた。船賃がしまひにはたゞになり、その上手拭一筋を呉れるさいふやうな烈しい競争になつて、今から考へるさ馬鹿げて、呆れた話に過ぎないが、この種の現象は當時瀬戸内海の沿岸のさころ／＼で時折見受けられたものであつた。

純友が據つてゐたさいふ日振島を右手に望んで、海上五里を、このたゞの小蒸汽に、或は渡海船の荷物の上に乗つかつて旅をする人を、私は羨しく思つたけれど、一度もさういふ機會は幼い私には恵まれなかつた。

初めて舟を漕ぐ

俵津村へ移住して直ぐ習ひ覺えたのは櫓を漕ぐことであつた。五つ六つの子供でも皆櫓を漕ぐ。私は或る夕方四五人の友達と一緒に舟に乗つた。重い櫓もリズムに乗つて動く時は迂るやうで、手には海の水さしいはうか、自分の舟さ

いはうか、そのさつしりとした重味が氣持よくもたれか、つて来て、身體全體がそれに應へようとする。決して手先ではない。全身をそれに心さ、すべてが一つになつて感じられるさき舟は前へ出る。引けば左へ、押せば右へ、ゆつくり／＼と頭を振つて前へ迂る。夕風の海に小波が立つ。三方の山が黔んで影を増すさ、海は嚴肅だ。私は生れて初めて櫓を漕いだあの夕方を忘れることは出来ない。初めのうちは、櫓は櫓ぐひからすぐ落ちて、時には船べりから外へ滑り出ることさへあつた。しかも檣の木のあの重い櫓！一度外れるさ、力のない、そして術をまだ知らぬ私は、その度毎にそこまで行つて重い櫓をかへ、櫓ぐひに入れるのであつた。入れて、またもこの位置に戻つて一漕ぎ漕ぐさもう外れる。また艦へ行く。繰返し／＼するうち、一つのコツを悟るのである。後年、松山中學へはいつた時、道後公園で自轉車に乗る稽古をしたが、やはり大體同じやうな努力をしてその術を覺えたやうに思ふ。しかも幼ければ幼い程速く覺えるさいふことは事實である。母は、或る夏水泳を習ふのだと言はれて岸でぢやぶ／＼やつてゐられた。祇園町には近くに砂濱がなかつたので、床屋の主人が誰かが竿の先に繩をつけて、岸壁から支へたり、色んな珍らしい方法を試みて稽古のお手傳をしてゐた。全く見て居れた様ではなかつた。でも、母は少々泳げるやうになつたさ喜んで

でゐられたが、四十を越してから物事を習ふのは大變だ。随分鹽水を飲まれたことであらう。

私は漁夫の子のやうに筋骨逞しい方ではなかつたから、いくら上手に漕げるやうになつても、體力が續かず、手にはすぐ豆が出来たりして到底選手にはなれなかつた。當時年に一回、近隣四五ヶ村の小學校對抗の競漕があつて、わが校にも幾組かの選手があつたのである。私は五年生の折やつこ補缺選手にまでなつた。舟底を焼き、油を塗つた新造の選手の舟に乗つて、時には舳に陣取り拍子木を叩く光榮を擔つたことゝもあつた。また、短艇競漕では全日本の覇を唱へたことゝもある宇和島中學では、私はその部の役員をしてゐた關係から、やはり補缺選手になつた。たゞし、一度も晴れの競技に出たことはなかつた。同じこゝが剣道の場合にも、馬術の場合にも、或はまた學業の場合にも言へるのであるが、それは後日の話さしやう。

幼な友達

祇園町さいふ名前は京都の祇園から取つたのだとトーちやんさいふ私より一年歳下の物識りの子供から教へられた。この子の両親はアメリカへ出稼に行つてゐて、叔父さんが旅館を営んでゐた。二年前、私が三十年ぶりにこゝを訪れた時、二十歳臺であつたその叔父さんも既に白髪さな

り、みづ／＼しい丸鬚を結つてゐた、嫁入つて来たばかりの叔母さんも白髪まじりで半病人のやうに衰へてゐた。トーちやんさいふのは伊井豊石君の愛稱で、東大の法科を出て、最近まで清瀬一郎さいふ人の下にあつて辯護士を開業してゐた。トーちやんは中學時代私の家に寄寓してゐたので特に親しかつたが、最近久しぶりで、遭つた時には、お互の住む世界が餘りにもかけ離れてゐて、何だか私には話がしにくかつた。トーちやんは旅館の子だけあつて、將棋が強かつた。子供の癖に、大人をつかまへて、誰それは、角落だの、香落だのと言つてゐた。また或る時期には、誰それは民政黨だの政友會だの噂もしてゐた。私ばかりでなく、多くの子供にはさつぱり興味の無い問題であつた。後頭部が斷崖のやうに、或は板のやうに突立つてゐたので、喧嘩をするに、皆は「ぼら」さいふ綽名を呼ぶことにしてゐた。「ぼら」は魚である。そしてこの魚は俵津の一つの名産でもあつた。灣の入口に「ぼら小屋」があつた。きれいな砂濱には清い流があつて、子供心にも、私はこの魚の潔癖を感じてゐた。しかし、あの頭の恰好を見るに少々うんざりするのである。「まむし」のこゝをわれ／＼は田舎で「はめ」ミ呼んでゐたが、この蛇の頭がやはり妙な形をしてゐる。また、鰻が同様である。本郷に来て、藤岡勝二先生なきに引張られて「大和田」で晝食をする時、少からず辟易したも

のであつた。

トーちやんよりも仲の良かったのは、駄菓子や魚を賣る家の茂夫さんだつた。この子も一年歳下だつた。祇園町は一筋町で合計二十軒にも足りなかつたから子供の数は數へる程しかない。トーちやん、茂夫さんの外に、最近傘屋の萬さんのうちに貰はれて來た俐口で、走るここの速いヨッチやん、蒲鉾屋の善八さん、床屋の惣ちやん俊ちやん兄弟、學校の先生の息子信孝さん、その裏の「うらなり」のやうな鋒ちやん、その弟で泣きみその侃さん。男の子はそれきりだつた。女の子は更に少く、茂夫さんの姉さん愛ちやん、さ鋒ちやんの妹トンちやんだけであつた。これらの幼な友達に一枚加へなくてならないものがある。それは老犬「ホタ」である。「ホタ」といふ名ではなかつたが、學校の行き歸りの、他の部落の子供達がさう呼んで相手になつてゐた。子供が多勢のときは入口で烈しく吠えるだけであるが、一人や二人の時は追つかけて行つて、子供を泣かしてゐた。別に嘯みついたりほしないのであるが、毎朝大變な騒動であつた。「ホータ、ホータ」ミからかふ子供の聲は學校が始まる數分前の報せミもこれだ。「ホタ」は私にはなつてゐた。一時私はこの犬の仔を内證で育てて、恰も自分の犬のやうにしてゐた。荒繩で引張つて遊びに出かけたこもあつた。おごなしの犬であつた。名前も忘れて想ひ出せない

が、この犬のお蔭で今でも犬が大好きである。私の知つてゐる學者に犬が大嫌ひな人がある。また犬もその人を大嫌ひだと言つてゐる。その證據にいつも犬に睨まれ、吠えられ、厭な思ひをさせられてゐる。女性にもそんな人があるが、普通の犬から憎まれるやうでは、そんなに賢夫人であらうミ、インテリであらうミ、怪しい人物に相違ない。今迄に犬や猫のお葬式を數知れず出して來たお蔭で、犬や猫に就いて少からず書くべきこことがあるが、機會を見てゆつくり語らせていたゞかう。

惣さんと善八さん

床屋の惣さんミ蒲鉾屋の善八さんミは二年上級であつたが、私はよく遊んだ。惣さんは眼のグリグリしたノッポであつて、勝負事や喧嘩には弱かつた。それに比べるミ善八さんは、むつつりしてゐて、多少耳が遠いのではないかミ思はれる程鈍かつたが、ガツシリした體、太い眉毛、黒い顔、兩手も大人のやうで頼もしかつた。殊に角力の強いこは學校中でも一二番であつた。勿論競漕の一流選手であつた。蒲鉾屋は叔父さんに當るのだが、叔父さんは、嚴格な人で、歩き振りからして俠客のやうだつた。ものを言はない親爺だつたが、私は見てゐるうちに魚が蒲鉾になる

過程が面白く、數時間も店先で眺めたこともあつた。眞白な絞の肉がはいつたり、お豆腐がはいつたりするのも見させた。エソの身が澤山はいればいる程上等の品だといふことも見てゐてわかつた。細かい骨を抜いたり、たゞいたり、搗いたり、並大抵の仕事ではない。善八さんはよく、あの兎の持つてゐる杵で、ボテボテ肉を搗いてゐた。下手に搗くミ肉が飛ぶから、めつたな人には手傳はせられないらしい。善八さんは時々店の竹筒の中から銅貨を盗んではお菓子を買つてゐた。子供心にも、私は誤魔化す人間こそんなここの出来ない人間に區別をつけてゐた。トーちやんはそんなここのをしなくともお婆さんから豊かにお金を貰つてゐた。惣さんは誤魔化さうにも、家に竹筒なんか無かつた。何しろ三人の男の子ばかりをかゝへてゐて、しかも床屋をやめた頃であつたから、惣さんの父も大變だつただらう。きまつた職業も持つてゐないのに、さうして暮して行けたのかしら。

惣さんの弟俊ちやんは二年ばかり下だつたが、或る時茂夫さんの家で喧嘩をして、私は引轉がして押へつけてやつた。すぐ大聲をあげて泣いてゐた。何でも股のあたりにおできが出来てゐたのがつぶれたさかで、大騒ぎをした。それからさういふもの、私は俊ちやんの父が向ふからやつて来るさう逃げつてゐた。何だか氣味の悪い親爺で、見るの

もいやであつた。海岸で遊んでゐても、親爺の姿が見えるさ、一生懸命で逃げて歸つた。そればかりではない、夢魔にさへ襲はれたこともあつた。子供の頃の大きな心配だつた。俊ちやんは竹馬の上手な子だつた。ぎんな山道でも、背よりも高い竹馬に乗つて走つてゐた。木登りも一番上手だつた。猿のやうな子供だつた。私達はよく祇園町のうしろのお宮の森で終日を暮したが、半日以上樹の上で遊んだことも珍らしくなかつた。樹から樹へ渡つて、鬼ごつこともすれば、隠れんぼもするさういふ風であつた。先年行つた時、このお宮の森も樹がまばらになり、お宮の建物も既に無かつた。それにも増して衰れを催したのは俊ちやん一家數人の者が、次々に斃れて、根絶したさういふ話であつた。肺病の恐ろしさよ！その昔、萬葉の歌人が、「大宮はこゝに聞けども」なんかさ歎じたが、そんななまやさしいものではない。あれだけピンピンしてゐた人々が一人も残らず、地上からかき消えてしまつたさう聞いて本當に吃驚した。あの善八さんも二十歳前に急死したさうである。兵隊歸りの兄の袍から卑猥な繪を盗み出して來て、船の中でわれわれに見せたのは、「そこで善八茶の袴」さういはれてゐたこの善八さんであつた。

「餓鬼大將」

茂夫さんは、先年會つた時健在で、長女が女學校を出たから嫁にやるのだと話をした。相變らず、父の店を引き繼いで酒や焼酎をも賣つてゐた。運漕店も兼ねてゐるらしくつた。この茂夫さんが前回お話しした糞壺に落ちた少年で、小柄ではあるがリスの如く敏捷で、走りつくらではいつも一等だつた。私は茂夫さんが一番好きで、一番多くこの少年と事を共にした。時々店の駄菓子を盗んで來て振舞つてゐるが、惡氣の無い、人に好かれる少年であつた。先生のうちの信孝さんは私と同級生だつたが、殆んど一度も遊んだことがない。後に理想的な小學校教員になつたさうである。

私達祇園町組は大體結束が鞏固で、時には他の部落へ夜襲をして喧嘩をふきかけたこともあつた。勿論子供の世界で、大人から見ればくだらぬ興奮であるが、高等學校のストームだつて、まあ大體それに似たやうなものである。或る夜、十丁も二十丁も田畑を跳び越え跳び越え敵を追つて行つた時、私は右の足の親指に何か刺らしいものを突き刺して、その後暫らく難儀をしたことがあつた。蛇の骨だ、私は思つてゐた。その頃、私は仕込杖を振り廻して指揮してゐた。誰に貰つたのか貰えてゐないが、中身には梵字が刻んであつて、朱が入れてあつた。弓も、この頃の遊び道具であつた。眞直な櫻の木を切つて來て、皮をぬ

き、刀をこしらへることも誰からか教へられてゐた。庚申山の老松から厚い皮を剥いで來て、小舟をくり抜くこともした。雷の落ちたさいふこの大きな松の木には、眞黒に焦げた處もあつた。天に沖する大木はお伽噺の天狗が住んでゐさうであつた。

祇園町のうしろの丘には段々畑があつて、薩摩芋が一面に葉を擴げてゐた。私達は或る日この畑で旗取りをして遊んだが、さしにも青々さしてゐる芋畑が、夕方迄にはすつかり踏み荒されてしまつた。もう夕飯の時刻で、ぼつぼつ引揚げようとしてゐる時、突然、「コラッ、さいつだ、ひこの畑を荒したのは！」といふ聲が聞えて來た。見る百姓が蹴を振りあげて怒鳴つてゐる。驚くまいことか、それこそ蜘蛛の子を散らすやうに段々畑をびよんびよん飛んで逃げた。私も捕へられては大變だ、脚に任せて逃げ歸つた。翌日のこと、茂夫さんのお父さんが、私の顔を待つてゐるさばかりに、かう言つた。「保さん、いたづらも大體にせんさいけんぞな。きよ(昨日)芋畑を荒して、芋が出來んようにしてしもうたさうだが、うちの茂が捕へられて、怒鳴り込まれて弱つたぞな。これからあんなことしちやいかんぞな。」そして、一體誰が大將だつたのだと、詰問されたが、茂夫さんは私に難儀のふりかゝるのをかばつて、たうさう名前を言はなかつたさうである。この事件から私は茂夫さんを

絶対に信頼するやうになつて、何でも打あけるこゝしにした。今は田舎くさい親爺になつてゐる茂夫さん！私はせめて、もう一度西下して、ゆつくり昔を語つてみたいやうな氣がする。

芋畑を荒したのは本當に悪かつた。その畑の側へ行くのも恐ろしい氣がした。況んやそのお百姓の家の前を通るのは更に恐ろしかつた。私は一つ悪いこゝしをしてゐる。先程述べたお官の森で戦争ごつこをしてゐる時、深い壕を掘つてその中に數人が隠れるこゝにした。今日でいふカムフラードを施すために壕の上には木や草を積みあげた。壕の天井を造るためには、侃^{ケン}さんに、叔父^{シヤウフ}さんのうちから板を持つてこさせた、叔父^{シヤウフ}さんは六^{ロク}松^{マツ}さんといふ實直な木挽さんだつた。侃^{ケン}さんは五六枚の新しい板を擔いで來た。三人してこれを二つに折つて、見事な天井をこしらへた。壕の中は土の香で一杯だつた。身體に當る壁や床には草や藁を敷いた。大喜びで壕の完成を祝したのはいふまでもない。こゝろが、軍事上のこゝで侃^{ケン}さん^{シヤウフ}意見^{イセン}を異にしたためであらう。私はひびきく侃^{ケン}さんをやつつけた。元來泣みそで有名な侃^{ケン}さんのこゝで、すぐ家へ告げあげに歸つた。數人の幼な友達の中でこの子だけ、いつも鼻汁を垂れ、袖をかんかんにこわばらせてゐた。意氣地の無い子供の代表といふのが侃^{ケン}さんであつた。するま、間もなく六^{ロク}さんのおか

みさんが恐ろしい權幕でわれわれの重壕へやつて來た。がみがみ言つてゐるご見る間に、眼の前で屋根を剥がし、二つに折れた新しい板をかゝへて、私を睨めつけ、「この餓鬼大將め、何でこんな悪いこゝしするのぢや。大事な板をへし折つてしもうて、それこそ、うちのおつさんに叱られるぞ」、と怒鳴つた。しかし、私はこれを聞いて却つて安心した。六^{ロク}さんは好人物で高名だつたからである。

級友の誰彼

小學校は、祇園町のお官の前の坂を登り、堀切を出るまゝすぐ向ふに見えてゐる。家から走つて行けば五分位だつた。校長先生は清家清太郎といふ口鬚のある立派な人であつた。私の組に不二^{フジ}さんといふ校長さんの娘がゐた。よく出来る人で、私が級長、不二^{フジ}さんが二番だつた。遊戯の時二人が向ひあつて手を繋いだりするま、顔が眞赤になつて閉口した。同級生もくすくす笑ひ、先生も面白さうに笑つてゐられた。私はいつの間にか、五年生になつた。色の白い美男子の宇都宮鹿之助といふ變つた名前の先生が受持教師であつた。多分代用教員である。この頃尋常科が六年制になつたものと思はれる。四年生から五年生になつて、私も大分ませて來た。女の子は遊ぶこゝしが既に妙に感ぜられるやうになつた。

副級長は宇都宮嘉壽太さいつて、今は村の助役をしてゐる。お父さんもたしか助役であつた。私は學校がひける嘉壽太さんの家へ遊びに行つた。お祖母さんがいつも「東山」さいふ芋の乾したのを兩手に二ばい藏から出して来て、二人に分けて下さつた。何をするさいふでもなかつたが、二人は仲良しだつた。嘉壽太さんの従妹の小浪さんさいふのが、やはり同級生だつた、私が中學生の頃には村の病院の看護婦をしてゐた。夏休みに一度俵津へ来て一週間ばかり遊んでゐた時、白い看護婦服にはち切れるやうな肉體を包んだ小浪さんを見て、私は看護婦はいゝなと思つたりした。話に聞くと、間もなく結婚して數人の子をあげたが、離縁され、隣接の村へ再婚したところ、今度は幸運が舞ひ込んで今では縣會議員の奥様であるさうな。人の運命はわからぬものである。

同級に萬さんさいふのが二人ゐた。一人は背の高い、五萬樂みたいな感じの子だつた。變な繪を學校へ持つて来て、先生に没收され、引き破られてしまつた。も一人の萬さんは、昔私の家に奉公をしてゐた女の人の子で、水車屋だつた。時折呼ばれて遊びに行つたが、村の一番端の遠い谷合ひだつた、水車がカタン、コトン、カタン、コトンと廻つてゐた。歸りにはいつも芋の粉を一袋貰つて歸つて来た。あの芋の粉團子！、もう、あの味を忘れてゐる。黒砂糖を

つけて甘からくして食べてゐたが、水車屋の萬さんは先年他界したさうだ。二人で大きな山桃の木にのぼつて、蛇や七分(さかげ)に怖氣ながら、種も一緒に飲み込んで食べ、歸る頃には口を眞赤にしたものだつた。あゝ、あの頃、桑の實もたらふく食べたこゝがあつた。紫色の口をして、手先も、着物も染め汚して歸つて来た。また青梅を食べて胃を痛め、七轉八倒して母をお醫者さんに走らせたこゝもあつた。金時(水あつき)を三四杯食べて夜中に吐いたりしたこゝもあつた。毎日毎日楽しい少年の日が續き、教科書なき開けてみたこゝもないばかりか、翌朝本包の所在さへわからぬこゝが多かつた。

一 夏を迪兄と共に

上灘村の家で病を養つてゐた迪兄は、その後健康を恢復して、村の小學校に教鞭をさるやうになつた。或る日母は「迪兄さんも近く教員の試験を受けるので、準備に忙しいさうな。兄さんのこゝだから、受ければきつゝ通るが、身體の方でひつかゝるのではないか、それだけが心配、でも、免狀をさつて貰つたらお母さんも「安心」に私に語られた。それから間もなくのこゝ、迪兄から私を一夏上灘へよこすやうにさ言つて来た。それを聞いた私は飛び上つて喜んだ。尋常科四年の夏である。

私には親類が少かつた。その上、兄弟が離れ離れになつて生活してゐるせいもあつて、兄の側へ行くまいふこころが大きな喜びであるのは勿論だが、前にも述べたやうに、上灘の叔父の家がすばらしく立派で、暮しも、芋粥ばかり食べてゐた當時の私にきつては豪華に思はれたからであらう。實際、叔父の家では冷飯草履なまきはくこころは思ひもよらぬこころ、風呂も毎日缺かしてはならないまいふ風で、何から何まで生活が變つてゐた。部屋さいふ部屋にはカーバイトの瓦斯が煌々き揮き、仕切の障子や襖も澤山あつて、しかも障子の棧なま細かい細工があつて見られるばかりのものだつた。主な部屋に立派な額が懸つて居り、長押には鎗さか何さか古めかしいものが掛けてあつた。唐草模様も美しい唐津の手洗がむやみに大きくて、小さな柄杓が端に危く載つてゐた。苔むした庭の石燈籠も二つ三つ、それが極めてお自慢のものばかり。また臺所はコンクリートで出来てゐた。今でこそ當前であるが、私の幼い頃にはそんな設備は町でも一二軒しかなく、極く珍らしいものであつた。ポンプは小學校にあるやうな瘦せこけたポンプは大變な違ひであつた。何か複雑な仕掛のやうで、暇さへあれば動かしてみたくなるほま手應へのよいものであつた。その上、叔母の寵愛を一身に受けてゐる犬がゐた。いつも疊の上、いや座蒲團の上で寝てゐた。食物なきでも人間に

劣らなかつた。藝は達者だし、主人の顔色を見るこころも人間以上であつた。

以上書きあげたこころ、尙その他、當時の私にきつて物珍らしくもあり、羨ましかつたこころが、後日すべて私の憎しみの種まならうまは！。一夏のお客さして迎へられた時あこころを以て眺めたものが、食客さして養はれれば、忽ち憎惡の對象に一變して了ふまいふやうなこころは、極めて普通の世の習ひで敢て奇まするには足りないが、なまけなまいふまには、私はそれを餘りにも幼くして経験してしまつた。後で詳しく語るこころであるが、この家の生活が私から、まだ残つてゐた少年の純真素朴な性質を根こそぎ奪ひ取つてしまつたのである。

迪兄は無口であつた。そのために、私は迪兄に對して何か遠慮を感じずにゐられなかつた。長く一緒に暮したこころがなかつたからかもしれない。兄は林檎山の家に寝泊りして終日勉強してゐた。私は毎日下の叔父の家から辨當を運んだ。よく新聞をちぎつて丸め、その上に消炭を置いて燻いで火をおこしたものだつた。一つ蚊帳に寝たこころもあつたが、山を下りて寝るこころが多かつた。兄は何を勉強してゐるのか、私にはわからなかつたが、それこそ寸時も本から離れたこころがなかつた。兄は人から尊敬されてゐるやうだつた。山の男仕達も「迪坊さん迪坊さん」と言つて、丁寧に

仕へてゐた。叔父も一目置いてゐたが、悪口屋の叔母まで、迪兄に對してはさうにもならなかつた。青白い顔をして、ランプの下でペンを走らせてゐる様子が今も臉に浮んで來る。時々山の男仕達は噴霧器を背負つて林檎の林の消毒をしてゐたが、兄は物靜かに色々な指圖をしてゐた。私は兄にくつついて三丁餘の林檎山を見廻つたこゝもある。山は名にし負ふ伊豫灘に面して、數里の沖合、青い海、青い空の一つになるあたりに青島さいふ小さい島が見えてゐる。熱柿のやうな夕陽がボテリと海に落ちてゆく頃、私は少年の感傷に耽つた。水平線近くを軍艦が走るこゝがある。「兄さん軍艦だね」「さ呼びかけるさ、兄は「うん、驅逐艦だね」「さ答へてくれる。いつだつたか、「保！お前、赤穂義士の話を知つてるか」「さきかれた。私は知つてはゐるが、話してほしいと言つたこゝろ、「それぢや聞いておいで、「さ言つて蚊帳の中の私に四十七士の物語をしてくれた。「天川屋儀平は男でござる」「さいふのは、たしかその時覺えた言葉だつたさ記憶する。いつまでも忘れ得ぬ迪兄の楽しい一夏であつた。

天才の死

果して迪兄は小學校教員檢定試験に、體操を除いて、合格した。冬くの人の驚異でもあつた。しかし、そのころ既

に、胸の病は絶望のこゝろまで進んでゐる。醫者である叔父も手の盡しやうなく、遂に迪兄はすべての計畫を擲つて、俵津村の母の許に歸つて來た。六疊一間の家を借りて母子三人が枕を並べて寝た。母は毎夜海へ何か棄てゝゐた。恐らく血のまじつた痰ではなかつたらうか！

天氣のよい日は、私は病める兄を小舟(或る大工さんが私に呉れた一間程の手製の小舟であつたが)に乗せて俵津の灣内は勿論、少し遠出さへもしたこゝがある。兄は釣もした。或る時隣の狩江村の中學時代の同級生を訪れたこゝがあつた。その人は神主で小學校の教員であつたが、夕食の時私を見て、「この子か、さうか、君の弟か、曾根保さいふのは、「さ如何にも感心して兄に話をしてゐた。私の習字が、何かに出品された時の話らしかつた。三月も暮れようとする頃、私は山一つ越えて卯之町へ兄の薬を買ひに行つた。さみしい使だつた。病勢が思はしくなかつたらしい。高價な藥！私は道後屋さいふ店でそれを買つた。そして序に俵津では求められない可愛い「ナイフを十五錢で買つて歸つた。病床の兄の眼がナイフを見つけた。母から、「それだから、あんたには困るのよ」「さ叱られた。それから間もなく、「天才」さ言はれた迪兄は二十三歳で、貧しい、しかし清らかな一生を了つたのだつた。

お寺へ弟子入り

狭い六疊の間、床の佛様の前で、母は村の和尚さんに「兄の遺言でも申しますか、その子はお寺に入れて貰ひたい。それが一番この子によささうだから、ミ申しましたから、」と話してゐられたが、その翌日私は學校から歸るに直ぐお寺へ走つて行つた。私にしては、兄が亡くなつてさびしくもあり、母を慰める術も知らず、たゞ何さなく何かの變化を望んでゐる時であるから、お經を習ふことには非常な興味を覺えた。和尚さんには子供がなかつたので近所の子供を可愛がつてゐられたが、私も和尚さんは好きだつた。小さな經机の前に端坐して、先づお經の本を押しただき、和尚さんが筆の軸でさゝれるところを見ながら、あごをつけて讀んだ。

歸命毘盧遮那佛 無染無着真理趣 生生值遇無相教 三世

世持誦不忘念 弘法大師増法樂 大樂金剛不空眞實 三

摩耶經如是我聞 一時薄伽梵成就殊勝 一切如來 金

剛加持三摩耶智……

私の記憶力は満點だつた。翌日和尚さんを吃驚させるほご上手に讀めた。村役場の前の呉服屋で、或る夕方私は母からお經を包む小さいモスリンの裂地を買つていたゞいすばらしい、蟲の食つた布切だつたが、私は今も紀念とし

て大切に保存してゐる。しかし、尋常科五年生になつて間もなくの頃、徹兄の反對にあひ、また迪兄の四十九日の命日に、不思議にも母の兄が急性肺炎で亡くなつたので、私のお寺通ひは中止されるに至つた。柱ミ頼む、褒められ者の長男を失ひ、今また残つた唯一人の兄に先立たれ給ふた母上の心情は察してもなほ餘りあるものがある。叔父は徳島稅務署長から最近別子銅山の運輸課長に榮轉したばかりであつたのでその急逝は一層惜しまれた。一方東京の徹兄は、私がお寺へ通つてゐるころ、和尚さんに見込まれて近く高野山の中學林に入れてもらふ約束なきを聞いて、母に絶対に反對だと言つて來た。兄は當時麻布鳥居坂のメソヂスト教會の書記を勤めながら、夜學に通つてゐたが、兄弟が宗旨を異にするころを嫌ひ、私を坊主にする位なら、東京へよこして貰へば、小學校をすませて、中學に入れてやつてもいいふのであつた。當時母は、俵津から四里ばかり離れた吉田町から月に一回巡回して來られるキリスト教の傳導師のすゝめで既に求道者になつてゐられたので、一も二もなく兄の意見に従はれることになつた。和尚さんには相濟まぬことになつたが、私は愈々徹兄に引きさられる身になつた。

(つゞく)